

### 3 4 ジョルジョーネの画面合成技法

2020

真鍋友範



《田園の合奏》1509頃 ジョルジョーネ

盛期イタリア・ルネサンス最高の画家といえ、皆さんは誰を思い浮かべるでしょうか。科学分野でも先進的開拓者であったレオナルド・ダ・ヴィンチでしょうか。少なくとも絵画の分野に限れば、その称号に値するのはジョルジョーネであると私は信じます。

何故なのか、その理由をこれから明らかにします。

~~~~~

理由は単純です。ジョルジョーネはレオナルドより進歩的かつ近代的な画面創造能力を持っていたからなのです。

もっとも、レオナルドだって当時は科学者の目で芸術を創造する抜群の能力を発揮していました。

例えば、【明暗法＝光と闇の表現】、【スフマー】、【構図】の研究においては、最先の開拓者でした。

レオナルドの【明暗法】や【スフマー】は、技法開発から時間を置くことなくジョルジョーネもまた習得しています。(図版1参照)



図版 1

\* 《イエスが導く如く、我（レオ 10 世）も導かん》【レオ 10 世の肖像画】ジョルジョーネ  
ただし、《人生の三世代》とする題名が既にあるが、同意できない判断です。

また、ジョルジョーネと弟子の合作、あるいは弟子の作品という説もある。おそらく、注文主のために完成させたのは、ティツィオーネ。ジョルジョーネ亡き後で、かなり後の時期。

レオナルドは同時に絵画の【構図】についても熱心に開拓しています。フィレンツェ時代に《三賢王の礼拝》を描きましたが、【構図】はひどい失敗作です。



《三賢王の礼拝》レオナルド・ダ・ヴィンチ

\* 遠近法では、建物の消失点（イエローの水平線上）と、  
描いた人の目線の高さ（レッドの水平線）は一致する。  
しかし、この作品では不一致。明らかに構図は失敗だ。

当然途中で投げ出してミラノに転出したのですが、フィレンツェ時代の最後の作品での【構図】失敗は、レオナルド自身に新たな課題を与えます。

それはミラノに移ってからの作品《最後の晩餐》と《ロンドン版岩窟の聖母》という【視線誘導の実験絵画】でした。

《最後の晩餐》において、レオナルドは観衆の視線誘導による構図法に齟齬のない【遠近法】を取り入れて、見事に【室内空間における構図】を完成させました。

続けて《ロンドン版岩窟の聖母》では、聖母の頭部中心軸線と天使の頭部中心軸線が交わるところに幼子イエスを配置し、さらにイエスを取り巻く視線の交点からもイエスが画面の中心であることを示す画面を作り上げました。この【頭部中心軸線と視線による観衆の視線誘導法】を完成させることで、【遠近法】に頼らない【自然空間における構図】も完成させました。

残念ながら、後者はその表現意図が聖母無原罪御宿り信心会の信奉する【聖母が絵画の中心アイテムではない】が故に、どうしても聖母の絵にしてもらいたかった信心会からは、当然のように【受け取り拒否】に会い、【描き直し】を要求されるものの、レオナルド自身は描き直しに決して同意せず、最後には裁判を経て、しゅしゅ弟子のアングロージオに聖人の図像を補筆させた上で信心会に受け入れられた、という曰く付きの問題作品でした。

つまり、レオナルドの絵画作品では、【描かれた対象の外面の究極的科学的再現】や、【身体動作による登場人物の内面の完璧な表現】、そして【絵画面における観衆の視線誘導の技法】こそが、彼の絵画での中心的研究課題だったのです。

一方で、ジョルジョーネは【レオナルドの先を行く表現実験】を、ジョルジョーネ特有の絵画表現として実践したのです。

さて、ここでジョルジョーネ作とされる三点の絵画を紹介します。

さて、クイズです。これらの共通点は何でしょうか。(図版参照)



《テンペスタ・嵐》



《イエスが導く如く、我も導かん》



《羊飼いの巡礼》

↑ 《人生の三世代》ではない

その答えは【画面合成】です。

まず、《テンペスタ・嵐》からです。結論から申し上げますと、これらのジョルジョーネ 作品は決して通説のような【風景画】ではありません。この作品は【貴族から依頼された故人への追悼画】です。ジョルジョーネが構成した叙情詩的内容は以下です。

男は、迫りくる嵐を象徴する稲妻を見ながら、故郷の街の母子の安否を気遣っています。しかし、描かれた時点で、男は既に戦いにより命を失っています。男の顔は衣服に比べて意図的に暗くぼんやりと表現されています。

裸婦は、当時の表現上のお約束ではヴィーナスです。天上の愛の偶像でもあります。でも生きている段階の妻は、迫りくる戦乱を象徴する稲妻の音を聞きながら、顔を曇らせて、遠くに出生した夫の安否を気遣っています。

ただし、ヴィーナスとして表現された妻と幼子はこの世に存在していません。

この絵画がジョルジョーネに依頼された段階で、すでにこの家族はこの世に存在していないのです。

描かれた両名は地上の人ではないのです。相互の距離は数キロから数十キロでしょうか。両者から稲妻の見える（聞こえる）位置に配置されています。

つまり、離れた位置の両者を、同時に時間も超越して描いているのが《テンペスタ・嵐》なのです。

男が女に目もくれず空を見ている理由、破綻した遠近法である理由、男の周辺のぼやけた草原の理由、前景の川付近の断絶した境目の理由、女が厳しい表

情である理由、男の顔がぼやけて暗い理由、白い石柱が折れている理由、男の持つ槍が半分のサイズで槍先が無い理由、男とビーナスの身長表現の比率が、1対1、2のサイズ差であることなど、全ては【画面合成】から説明できるのです。

2番目の例は、通説では《人生の三世代》という題名の作品ですが、これは題名の誤りがあると信じられます。この作品の題名は、正確には《イエスが導く如く、我（レオ10世）も導かん》という題名でしょう。【導かん】とは、もちろんキリスト教の布教です。【作品分類は寓意画ではなく、肖像画なのです。】

この絵画については、注文されたのがジョルジョーネ在命中で、しかもレオ10世がローマ教皇になる前でしたが、フィレンツェのピッティ宮に納入されたのは、ジョルジョーネが亡くなり、レオ10世自身も教皇位から退位した後と記録されている。つまり、注文時は盛期ルネサンスであったが、納入されたのはマニエリスム期であったということなのです。マニエリスム期は、絵画に象徴的暗喩を込めることを好んだ時代だったのです。その経緯がこの誤った題名《人生の三世代》へと繋がったと考えられます。

3番目の作品《羊飼いの巡礼》は、一見すると宗教画に見えますが、単純な宗教画ではありません。

【中央の人物の顔が暗く不明確に描かれていること】が、特徴です。気づいていただきたい点は、登場人物が共通して同じような【暗くて不鮮明な顔の描写】なのです。

まず《テンペスタ》の中の【兵士らしき人物の顔】、《田園の合奏》の中の【弦楽器を弾こうとしている中央の男の顔】が、同じく【暗くて不鮮明な顔の描写】なのです。

つまり、わざと【暗くて不鮮明な顔の描写】によって、故人であることを適切に表現し、【注文主の追慕の心情に応えている追悼画】なのです。

さて、本題のジョルジョーネの【合成画面】構成に戻ります。

最初は、《テンペスタ》の構成です。

この作品では、兵士らしき人物、ビーナス、嵐の迫る故郷の街の遠望の3要

素が、まるで一つの場面であるかのようにまとめられています。

何よりも【驚くのは、描かれた時代が盛期ルネサンスであったこと】です。

【現代のデザイナーがパソコンのソフト上で行う画面合成は、既に盛期ルネサンスのジョルジョーネの作品に前例があるのです。】

さらに、《イエスの導く如く、我も導かん》をもう一度鑑賞します。

描かれている三人は、左側が注文主のレオ 10 世、後ろの二人（中央の若い弟子と右側のイエス）です。後ろの二人はスフマート技法で描かれ、明らかに左の赤い服の男とは描き方を区別して表現されています。

この理由には二つの可能性があると考えられます。

ひとつは単純にジョルジョーネ亡き後、弟子の画家が最初から自己のスタイルで描いた絵画であったこと。

もうひとつは、ジョルジョーネが生前途中まで描いていた作品を、あとを次いで完成させた弟子の画家が、当初のジョルジョーネの表現趣旨を理解して描き、完成させた作品であったというもの。

ジョルジョーネ作への周囲の弟子たちからの尊敬があれば、師匠ジョルジョーネの作品を損なわない努力をするであろう。このことから、おそらく後者が正しいと考えられます。

つまり、この絵画に於いて【二種類の描き方が存在する事実の根底】には、【二種類の異なった空間の存在を表現するという意図の存在】を読み取る必要があるのだらうと考えられるのです。

具体的に述べると、【過去である聖書の物語場面】と、【現在そこにいる教皇個人の肖像】が【画面上で合成されている】のです。

総括すると、ジョルジョーネは、この【異なった空間の画面合成】という絵画の可能性に対し、【盛期ルネサンスという、考えられないほど古い時代に、いち早く目覚めた画家だった】のです。

3番目の例は《羊飼いの巡礼》という作品ですが、これも合成画面です。【過去の聖書の物語として故人がはめ込まれた天上界】場面と【背景の地上界】が合成されています。

【ジョルジョーネは、天上界を必ず田園風景として描いた】のですが、現代

人はこれを、背景の地上の田園風景と連なっていると錯覚してしまい、容易にはこの作品が、【故人を追悼するジョルジョーネ特有の追悼画形式の合成絵画】と気づけません。

故人の追悼画であるとする根拠は、《羊飼いの巡礼》の中の中央に立っている羊飼いの暗くて不鮮明に描かれた顔の表現が、《嵐》の中の兵士らしき人物の顔の表現や、《田園の合奏》に見られる人物表現と共通性があるのです。

【ジョルジョーネ作品は、対象そのものに迫るレオナルドの姿勢とは明らかに異なる絵画アプローチが見られます。】

盛期ルネサンス期の画家ジョルジョーネは、現代人も驚く程早い時代に、当時最先端の【画面合成技法】を獲得していた天才画家だったのです。